

# 天地人

第6号 No.6

April 2009

ISSN 1882-3580



チベット自治区と雲南省の境に聳える梅里雪山 (6,740m) はチベット人の信仰の山である。山群を一周する巡礼の道があり、山の見える場所にはルンタ (祈祷の旗) が祀られる。2003年11月小林尚礼撮影

## Contents

中国環境問題研究の国際的ネットワーク形成にむけて 窪田 順平 — 2	确立中国环境问题研究国际网络 洼田 顺平 — 2	Toward establishing an international network on Chinese environmental issues KUBOTA, Jumpei — 2
「地球研エコヘルズプロジェクト」 門司 和彦 — 4	“地球研的生态健康项目”介绍 门司 和彦 — 4	Introduction of the RIHN ecohealth project MOJI, Kazuhiko — 4
新疆文物考古研究所の紹介 伊藤 敏雄 — 6	新疆文物考古研究所简介 伊藤 敏雄 — 6	Introduction of the Xinjiang Archaeological Research Institute ITO, Toshio — 6
雲南省健康と発展研究会とエコヘルズ 蔡国 喜 — 8	云南省健康与发展研究会和生态健康研究理念 蔡国 喜 — 8	Yunnan Health and Development Research Association (YHDRA) CAI, Guoxi — 8
生活の豊かさと青い山を求めて 蒋 宏 偉 — 10	经济发展与环境保护共赢的农村开发模式 蒋 宏 伟 — 10	Environmentally sound development in rural China JIANG, Hong-wei — 10
遊牧文明を源とする草原文化の現在 ナムジリン・ボルド — 12	以游牧文明为传统的草原文化 宝 力 道 — 12	Present grassland cultures derived from nomadic civilizations NAMJILIN, Bold — 12
東方アジアの夢 立本 成文 — 14	东方亚洲之梦 立本 成文 — 14	Imagining Eastern Asia TACHIMOTO, Narifumi Maeda — 14
反転する中国史 高 津 孝 — 15	重申中国史 高 津 孝 — 15	Turning Chinese history on its head TAKATSU, Takashi — 15
ウと生きる、ウが生きる 卯田 宗平 — 16	与活跃的鸬鹚一起生活 卯田 宗平 — 16	Living with active cormorants UDA, Shuhei — 16
お知らせ — 16	最新动向 — 16	Notification — 16

# 中国環境問題研究の 国際的ネットワーク形成にむけて

中国環境問題研究拠点リーダー 窪田順平



人間文化研究機構が実施する地域研究のひとつである現代中国研究の一拠点として、総合地球環境学研究所に中国環境問題研究拠点が設置されて2年が過ぎようとしている。第1期5年間の研究計画の中間点ともいべき3年目を迎えるこの時期に、ここでこれまでを総括し、今後の方向を考えて見たい。

中国環境問題研究拠点では、「中国の社会開発と環境保全」をテーマとして、学際的、総合的な環境問題研究を行うという地球研の設立の趣旨に沿って、積極的な活動を行ってきた。開発と環境保全という大きくくくったテーマを、個別の研究班や地球研の研究活動のベースとなっているプロジェクトにわかれて研究する手法をとらず、1年目は水の問題、2年目は食料と農業の問題といった中心課題を設定し、これをすべての拠点メンバーのみならず外部の優れた研究者にも加わっていただいで研究会を開催し、さまざまな視点から検討を加える手法をとった。その議論の積み重ねを基に、国際シンポジウムを開催し、さらにそれを出版という形で成果を発信してきた。

第2回の国際シンポジウムの成果に関しては、2009年2月に『中国の水環境問題—開発のもたらす水不足』（中尾正義・銭新・鄭躍軍編、勉誠出版）として刊行された。中国語版『社会开发与水资源水

环境』（陳菁・銭新・中尾正義編）も河海大学出版社より同時に発刊された。以後のシンポジウムの成果も順次刊行の予定である。またニュースレター『天地人』も順調に発刊され、第6号を数えることとなった。この間、研究会やシンポジウム、ニュースレターを通じて、日本のみならず中国も含めてさまざまな研究機関、研究者との学際的な交流もすすみ、ネットワークも形成されつつある。これらはまさしく地球研的な研究のすすめ方であったといえる。地球研はもとより環境問題の根源が人間の生き方の中にあり、広い意味での人間の文化の問題であって、これを地球規模の問題としてとらえる立場にある。これは個々の地域でさまざまな形で発現する環境問題を、地球環境という視野の中で考えて行くということであり、一方で地域研究という枠組みときわめて親和性が高く、それが拠点の活動の特徴となっている。

今後3年間の中国環境問題研究拠点の活動が、これまでの基盤の上にたってさらに発展して行くために、取り組むべき二つの課題があるだろう。ひとつは中国の環境問題に関して、周辺諸国との関わりを意識しながら、単に日本と中国の間の連携だけではなく、アジアをはじめとして広く国際的な連携をはかって行く必要があることである。いうまでもない



左：  
『中国の水環境問題—開発のもたらす水不足』  
(中尾正義・銭新・鄭躍軍 編、勉誠出版、2009年2月)

右：  
『社会开发与水资源水环境』  
(陳菁・銭新・中尾正義 編、河海大学出版社、2008年12月)

ことであるが、中国の環境問題は世界的にも注目されており、さまざまな分野に優れた研究者、機関が多数存在する。こうした研究者との学術的な交流をはかることによって、中国環境問題拠点が国際的な研究ネットワークのハブとなることを目指したい。

もうひとつは、現代中国研究の各拠点との連携の強化である。これまでも現代中国研究に関する国際シンポジウムや個別の研究會などを通して交流・連携を実施してきたが、それをさらに発展させていきたいと考えている。現代中国の各拠点は政治、経済、歴史など専門性の高い優れた研究が行われており、

共同で環境問題と取り組むことによりさらに研究を深化させ、あらたな展開をはかることができる。幸い2010年1月30、31日に開催される本年度の国際シンポジウムは、環境を共通のテーマとして京都で開催される予定であり、絶好の機会に恵まれたと言える。

先に述べた年度ごとの中心課題として、今年度は「水」、「食と農」に引き続き「都市」を取り上げる予定である。この課題を通して国際化、連携の強化をはかり、中国環境問題研究拠点のさらなる発展を目指したい。

## 摘要

# 确立中国环境问题研究国际网络

中国环境问题研究基地 代表 洼田顺平

中国环境问题研究基地，本着以设立综合地球环境学研究所（地球研）的宗旨——研究跨学科的综合地球环境问题，致力于中国环境问题研究。第一年以“水”，第二年以“食和农”为题，召开了基地的国际研讨会，并

出版了研究成果。今后不限于日本、中国，计划展开以亚洲为首的国际合作。加强与当代中国地区研究各基地之间的协作。通过这些活动广泛确立国内外中国环境问题研究网络为目的。

## Abstract

# Toward establishing an international network on Chinese environmental issues

Leader at RIHN-China KUBOTA, Jumpei

Based at the Research Institute for Humanity and Nature (RIHN), the RIHN Initiative for Chinese Environmental Issues (RIHN-China) conducts interdisciplinary research projects on Chinese environmental change, environmental preservation and social development. RIHN-China is a part of the “Contemporary Chinese Area Studies” program, an international network created by the National Institutes for the Humanities (NIHU, Japan) to promote China-based area studies. In its first two years, RIHN-China had two focal themes: water in the first

year and food in the second; they were the subject of three international symposia and several published manuscripts. In the coming years, RIHN-China intends to strengthen the international academic network examining Chinese environmental issues through increased collaboration with those already involved in the Contemporary Chinese Area Studies program, and through increased exchange with related researchers and institutions in China, the China-region and around the world.

## 「地球研エコヘルズプロジェクト」



総合地球環境学研究所 門司和彦

「地球研エコヘルズプロジェクト」は熱帯モンスーンアジアの環境変化、そこに暮らす人々のライフスタイルと疾病・健康状態の変化の関係を対象とします。フィールドは主にラオスとバングラデシュですが、中国での環境と疾病構造の変化にも関心を寄せています。

感染症・非感染症を問わず、ある疾病に罹る確率は、遺伝的要素のほか、その人が暮らしている環境と、その中での生活・ライフスタイルに影響されます。遺伝的要素も過去のそれを反映しています。最近の一部の非感染症を「生活習慣病」と呼ぶようになりましたが、実は感染症も生活習慣病だと私は思っています。環境とライフスタイルがそれぞれの感染に大きく関わっているからです。

ところが、近代的な生物医学と疫学では、一つの原因と一つの結果（疾病）を結びつける還元主義的研究が進み、健康と疾病にかかわる事象を大きく取り上げない傾向にあります。その結果、1対1の対応がわかると比較的短絡的な方法によってその疾患を排除しようとします。そのような方法は先進国では成功しても途上国ではうまくいかない場合も多々あります。つまり、その1対1の対応の周辺を構成する要素こそが問題であり、それらの要素はそれぞれの土地の自然や、気候、文化や歴史に根付いているからです。往々にして外部から良かれと思ってやったことが持続可能な問題の解決に結びつかず、その結果が今日の世界の健康格差となって現れています。私は、2003年度から実施された地球研生態史プロジェクト（代表：秋道智彌教授）でそのことを身をもって実感することができました。それが本プロジェクトの発想の原点です。

例えば、メコン川が洪水となることは、メコンと共に暮らす人々にとって大きな問題ですが、それが、マラリアの流行や、回虫などの土壌伝播寄生虫の感染率を抑え、次の年に水田での豊作をもたらし、漁獲量を増やします。ところが一方、そのように氾濫原で育った魚はタイ肝吸虫に感染している割合が高く、住民の多くが感染します。洪水を全く止めれば、漁獲量は減



ラオスサバナケットのボート（アメリカ軍の飛行機の残骸で作られている）



ラハナム保健所スタッフ（人口静態動態調査システムを把握）

り、化学肥料に頼る農業に転換していきます。すべてのことに一長一短がある中で、住民が十分な理解のもとでどのように生きていけばよいのか、外部の者は何ができるのか、それを歴史の中で全体的に捉えたいと考えています。メコン川やその支流の上流にダムができれば下流の人々が様々な影響を受けることは確実です。近代的な灌漑施設ができればそれによっても生活も健康も影響を受けます。

1955年に中国を訪問した佐々は、武漢の南、五大湖あたりから揚子江をかこむ広大な湿地が、アジアの穀倉地帯であると共に、マラリア、2種のフィラリア、日本住血吸虫症の広大な流行地であることを報告



ビエンチャン郊外からタイを望む（2008年2月ラオス）



水に浸るタイの農村

しています（佐々学編著『アジアの疾病』新宿書房、1978）。これらの疾患はかつて非常に大きな公衆衛生学的問題でしたが、環境改変と医療サービスの普及によって、多くの地域がこれらの病気から解放されました（住血吸虫は僻地では残っていますし、感染を原因とする肝疾患患者も多くおられます）。一方で、当時は無かったエイズが徐々に広がり、肥満・喫煙・飲酒も大きな問題となっています。

人々の健康と生存はその人々が利用し依存している生態系によって大きく規定されています。そのシステムが保全されないと持続可能な健康と生存は得られ

ません。プロジェクトでは熱帯アジアの人間生態系変化と疾病健康構造変化の把握に努め、生態系を壊さずに健康を維持する方略や、健康を損なわない生態系の改変を考えます。「人間生態系」と書いたのは、生態系が人間を排除した「自然」ではなく、「人間」を含んだ系を指すからです。この認識は、近代化・産業化した社会の都市に住んでいる我々にとっては極めて実感にくいものですが、それを如何に具体的データをもって認識してもらえるかがプロジェクトにとって、地球研にとって、また、人間のより長期的な安寧にとっても重要だと考えます。

## 摘要

# “地球研の生态健康项目”介绍

综合地球环境学研究所 门司和彦

人的健康与疾病取决于其所处的人类生态系统。因此，从人类长期的生存和健康来考虑，我们必须保护这个人类生态系统。这就是生态学上的健康观，即生态健康概念。让这种观念深入到大多数人的心目中，将有助于从根本上

解决地球环境问题。地球研的生态健康项目，就是将焦点汇聚于生活在热带亚洲地区的人们的生态健康及传染病上来展开研究。

## Abstract

# Introduction of the RIHN ecohealth project

RIHN MOJI, Kazuhiko

A human population health profile can be seen as an outcome of the human ecosystem with the human population as a part of the system. The conservation and construction of sound human ecosystems, therefore, is essential to the sustainable survival and health of human populations. This human ecological approach to health and disease is the “ecohealth”

viewpoint, and the sharing of this view among human beings worldwide is a fundamental key to the tackling of local and global environmental issues. The RIHN ecohealth project tries to accumulate valuable data, focusing on the relation between infectious diseases and environment, to support this view in tropical monsoon Asia.

# 新疆文物考古研究所の紹介



大阪教育大学 伊藤敏雄

新疆文物考古研究所は、新疆ウイグル自治区の区都ウルムチ市にあり、同自治区内のすべての文物の調査・発掘・保護及び研究を担う専門研究機関として、新疆ウイグル自治区博物館や各地の文管処（文物管理处）等と連携しながら、自治区内の遺跡・文物の調査・発掘・保護・研究に従事している。

その前身は、1960年成立の「新疆哲学社会科学組」下の考古研究所で、一旦解消された後、中国科学院新疆分院民族研究所内の考古組（1962年）、新疆博物館内の考古隊（1971年）、新疆社会科学研究所以内の新疆考古研究所（1979年）を経て、1986年に新疆文化庁管轄下の新疆文物考古研究所として成立した。

新疆考古研究所副所長・所長を経て、初代所長となったのが、穆舜英女史（1932-2008）で、1980年の「楼蘭の美女」ミイラ発掘で著名である。第二代所長が王炳華氏（1935-、現・中国人民大学教授）で、日本では「楼蘭の美少女」ミイラ発掘で知られているが、新疆考古に関する多数の論著を発表し、新疆考古学の代表的研究者である。現所長のイデリス・アブドラス

ル氏（1951-）は、第三代所長で、細石器文化の研究を専門としているが、楼蘭ルートの開発や克里雅河流域調査、小河墓調査（写真）で指導的役割を果たしたことで知られている。

現在、研究所は、イデリス所長以下、張玉忠（1951-）・于志勇（1966-）両氏を副所長とする体制で、漢族・ウイグル族・カザフ族・回族・シベ族など60人以上が所属し、弁公室（事務室）、考古研究室、文物保護室、資料情報室、技術室などが置かれている。

研究所は、天山山脈以北の草原地区や、タリム盆地周辺地区、トルファン盆地地区、楼蘭地区、バルクル地区、ウルムチ周辺地区など、自治区内各地の遺跡・文物の調査・発掘に従事し、数多くの優れた成果を挙げてきた。近年の発掘・調査としても、カシュ河・テケス河墓（2001～2005年）、小河墓（2002年～2004年）、楼蘭壁画墓（2003年）、ダンドンウィリク仏寺の壁画（2002年）、ピシャン県のヤンハイ墓地（2003年）、クチャの晋十六国壁画墓（2007年）、バルクルのトンヘイゴウ遺跡（2007年）など、全国的に注目される重要な



研究所発掘の小河墓

成果を挙げている。このうち、小河墓とダندانウィリク仏寺の壁画が、2004年にNHKの特別番組「新シルクロード」で放映されたことは記憶に新しい。

また、海外の研究機関との合同調査にも積極的に取り組んでおり、1988年から始まった日中共同のニヤ遺跡発掘調査をはじめ、日中共同のダندانウィリク遺跡調査、交河故城溝西墓地調査、フランスの科学研究センターと合同のケリヤ河流域調査などで、めざましい成果を挙げている。2007年からは、総合地球環境学研究所の佐藤プロジェクト「農業が環境を破壊するとき」の一環として、小河墓遺跡に関する共同調査を実施している。

なお、研究所では、展覧室も充実しており、「楼蘭の美少女」ミイラをはじめ、研究所が各地で発掘した秀逸な文物が地区別に多数展示されており、一見の価値がある。



小河墓西方の漢墓を案内するイテリス所長

(参考文献)

木英 (穆舜英)

「新疆维吾尔自治区社会科学研究考古研究所」

『中国考古学年鑑 1984』文物出版社、1984年12月

広中智之

「新疆におけるシルクロード関係の研究機関および研究者」

『シルクロード研究』(創価大学シルクロード研究センター)

創刊号、1998年3月

## 摘要

## 新疆文物考古研究所简介

大阪教育大学 伊藤敏雄

新疆文物考古研究所位于新疆维吾尔自治区乌鲁木齐市。作为文物考古方面的专业研究机构，该所肩负着对自治区内所有文物进行考古调查、发掘、保护及研究的重任。该所自成立以来，与新疆维吾尔自治区博物馆及各地的文物管理处通力合作，对自治区内的古遗址和

文物进行考古调查、发掘、保护及研究，成果显著。其中，也有日本人十分熟悉的“楼兰美女”木乃伊、“楼兰美少女”木乃伊、小河墓葬及丹丹乌里克佛寺壁画等考古调查和发掘工作。

## Abstract

## Introduction of the Xinjiang Archaeological Research Institute

Osaka University of Education ITO, Toshio

The Xinjiang Archaeological Research Institute is located in the City of Urumqi, in the Xinjiang Uygur Autonomous Region. The institute is a specialized research organization that handles the study, excavation, preservation, and research of all of the cultural assets of this autonomous region. It has links with the Xinjiang Uygur Autonomous Region Museum and cultural administrative offices in other areas. In its

work related to the historical ruins and cultural assets of the autonomous region, the institute has many notable achievements which are also well known in Japan. These include the excavation and study of the “Loulan Beauty” mummy, the “Loulan Beautiful Girl” mummy, the Xiaohe Graveyard, and the mural at a Buddhist temple at Dandan-Oilik..

# 云南省健康与发展研究会 和生态健康研究理念



综合地球环境学研究所 蔡国喜

## 一 总体概况和研究理念

云南省健康与发展研究会(Yunnan Health and Development Research Association, 简称 YHDRA), 原名云南生育健康研究会(Yunnan Reproductive Health Research Association, 简称 YRHRA) 于 1994 年 3 月正式成立, 是一个跨学科的民间学术团体, 属于云南省科协下属协会。YHDRA 以医学和社会科学高级研究人员为骨干, 现有会员 188 人, 来自云南数十个单位, 包括院校、科研院所、计划生育及医疗卫生部门和新闻单位等。

YHDRA 的宗旨是: 促进社会科学和医学的有机结合, 开展健康和发展领域的理论研究、培训和社会服务, 关注人类健康和发展相关的社会、文化、经济等方面的因素, 为决策部门和社区组织提供咨询信息。

YHDRA 扎根于云南独特而丰富的多元文化, 深入城乡社区进行妇幼保健、计划生育服务及广大人群的健康教育等活动, 并以社会学、人类学等学科的田野考察为基础, 结合若干会员在国外留学、研究及交流中汲取的营养, 积极开展学术研究, 提供相关培训与社会服务。

YHDRA 坚持每月第一个星期六上午举行学术例会, 通报信息、举办学术讲座。此外, YHDRA 依据社会需求, 组织会员创造性地开展项目或参与性小组活动。

YHDRA 强调具有社会性别敏感性的健康促进和社区发展, 重视研究与服务相结合, 研究与干预性项目相结合, 倡导多学科参与。

YHDRA 特别重视贫困农村的公共健康服务, 开展了一系列的研究和项目, 涉及传统文化与健康, 生殖道感染, 性病/艾滋病的预防、控制及关怀, 流动人口的保健服务, 妇女地位、权益及其健康, 扶贫与妇女地位及生殖健康的结合, 男性在生殖健康中的责任与参与, 青春期及青春前期健康教育, 生殖道恶性肿瘤患者的社会支持与服务, 等等。

YHDRA 通过会刊——《通讯》、《译丛》以及专著/论文等出版物, 与国内外相关研究机构进行学术交流; 通过公众媒介、科普讲座等向社区和公众传播健康知识与信息, 增进群众的自我保健意识。

## 二 沿革和具体研究方向

1, 云南生育健康研究会(Yunnan Reproductive Health Research Association, 简称 YRHRA) 从 1994 年 3 月份成立后, 致力于促进贫困地区(包括很多少数民族村落)的妇女健康状况的工作。他们在早期的研究中发现: 单单以诸如临床医学或者哪一个单学科为基础的努力完全不能从根本上改善广大农村妇女的健康状况。他们面临两个挑战: (1) 如何接近目标人群并且进行有效的健康教育; (2) 如何让她们把得到的健康知识升华为行为变化。该研究会在经过不懈的努力和摸索之后, 成功地取得少数民族社区和经济欠发达地区的信任和理解, 并对这些地区的妇女生殖保健的改善作出了积极的贡献。

2, 2007 之后, 云南生育健康研究会(简称 YRHRA) 更名为云南省健康与发展研究会(Yunnan Health and Development Research Association, 简称 YHDRA), 把它的研究范围从妇女保健扩展到了全部的健康相关领域, 并重点关注环境与健康的关系。它坚持以多学科综合研究的视角来尝试剖析和解决与社会发展并存的各种问题。目前 YRHRA 拥有 4 个多学科合作研究团队(棕树营小组, 勐腊小组, 瓦卡小组, Heijing 小组), 成员有来自人类学, 生态学, 经济学, 环境工学, 公共卫生学, 社会学, 法学等各专业的第一线的研究者以及政府部门, 新闻媒介等各方面工作人员。这里简单介绍一下他们正在开展的几个项目:



Staff of Yunnan Health and Development Research Association (YHDRA)



(upper left) :  
Professor Zhang, Director of  
YHDRA (right) in field



(upper center) :  
Interview with asbestos seller



(upper right) :  
The use of asbestos roof in rural  
communities, Yunnan

(lower left) :  
Health education for minority  
women



(lower right) :  
Health education for Zang people

### 1) 滇池湿地项目 (Dianchi wetland project)

本项目综合调查了被污染的昆明市滇池引发的各种湿地生态系统改变，周边群众反应，以及政府采取的相应措施等。

### 2) 石棉瓦健康影响项目 (Asbestos roof project)

该项目调查了云南边境农村地区石棉瓦的使用现状，可能由其引起的各种健康影响，通过分析导致其流行的各种要因后，探讨今后如何采取有效的健康教育以及干预措施以期达到消除或者减缓这种不良环境因素对村民们带来的健康危害。

### 3) 过度种植橡胶树危害研究项目 (Rubber tree project)

该项目着眼于近年来在云南南部过度种植橡胶树的现状，并阐明其可能导致对当地农村的用水安全，水源枯竭等问题。

### 4) 生态移民项目 (Eco-migration project)

该项目着重于观察一个从寒冷山区集体移民到相对暖湿的河谷地区的藏族村庄。深度考察这种生态移民对少数民族的社区发展和健康影响的可能影响。

## 要 旨

## 雲南省健康与發展研究会とエコヘルス

総合地球環境学研究所 蔡国喜

雲南省健康与發展研究会 (YHDRA) の前身は 1994 年 3 月に設立された雲南省生殖健康研究会 (YRHRA) である。YHDRA は非政府組織 NGO であり、なおかつ非営利組織 NPO でもある。YRHRA は雲南省科学協会に属し、雲南省の大学、研究所等に属する社会学、経済学、人類学、

医学、生態学、環境工学、法学などの研究者 188 名からなる。主に中国西南部で活動している。学際的なアプローチを用い、社会開発と経済發展が貧困地域や少数民族の人びとに与える健康影響を検討している。

## Abstract

## Yunnan Health and Development Research Association (YHDRA) and eco-health concept

RIHN CAI, Guoxi

Yunnan Health and Development Research Association (YHDRA) is a non-governmental and non-profit organization rooted in Yunnan Province of China. The overall goal of this organization is to encourage integration of social and health sciences, to raise public awareness and advance knowledge

in health & development in China, to improve health services with an emphasis on the increasing understanding of the needs of the disadvantaged communities and poor households in rural China.

# 生活の豊かさと青い山を求めて

## — 中国の海南島からの報告 —



東京大学大学院医学系研究科 蒋宏偉

2000年10月、修士論文の調査地を探すため、私は初めて中国の海南島を訪れた。それ以来8年間、現地政府の許可を得て、途切れなく毎年海南島先住民のリー族の村に住み込むことができた。海南島は中国の大陸の南とベトナムの東に位置している。陸地面積は日本の九州と同じぐらいで、およそ3万平方キロメートルである。人口はおよそ800万（2004年現在）、そのうち120万程度はリー族である。

私はリー族のP村という村でずっと調査してきた。住民のほとんどはリー族の倅(Ha)という方言集団に属している。村落が海南島第二の河川昌化江の沖積平野と山岳部の境目に位置しており、村落住民は伝統的に水田耕作・焼畑農耕・狩猟・採集など複合的な生業を営んできた。1949年以降、他の中国農村と同様に、同村は人民公社の一部となったにもかかわらず、生業そのものに大きな変化はなかった。同村が本格的に「生業転換」を迎えたのは1980年代に入って、生産請負制が始まった以降のことであった。村落住民は徐々に焼畑農耕をはじめとする伝統的な生業を放棄し、パラゴムやリュウガン、ライチなどの換金作物を栽培するようになった。私のP村調査では特に1980年初頭から現在までの20数年間に起きた市場経済化の「生業転換」のプロセスに注目してきた。

他の中国農村と同様、P村の「生業転換」に重要な役割を果たしたのは政府の政策であった。具体的にこれ



冬、村落周辺に広がっている水田とパラゴム林

らの政策をあげると、灌漑システム整備とハイブリッド水稲品種の導入を中心とした水田増産政策、パラゴム、リュウガン、ライチを中心とした換金樹木栽培の推進政策、焼畑禁止を中心とした森林（環境）保護政策がある。

これらの政策は実施された初期、村落住民からいろいろな抵抗を受けたが、結果的に村落住民に受け入れられ、村落の開発と環境保護は政府および村落住民が両方期待している方向に進展しつつある。パラゴムの導入はその一例として取り上げることができる。

1985年ごろ、P村のA世帯は、地元政府からパラゴムを植えたら儲かると聞き、家の余剰米を売り尽くし、その売却金と家族全部の貯金を投じ、パラゴムの苗木を購入し、自分の焼畑にこれらの苗木を植えた。その後およそ10年間、何の収穫もできず、よその村人に笑われ続けてきた。転機を迎えてきたのは、10年後の1995年の事である。この年、A世帯は初めてパラゴムのタッピング（パラゴムの樹液を採取すること）をすることができた。その結果、A世帯は毎日豚肉を食べられるようになった。そして、息子を市の農業専門学校にも通わせた。これらのことはすでに十数年経った現在でも、依然として村人の記憶に新しい。

A世帯の「事件」を機にして、村落住民は本格的にパラゴムの栽培を始めた。ハイブリッド水稲の増産によりもたらされた余剰米は村人の換金作物の投資資金となったほか、換金作物の収穫にいたるまで村落住民の生活を支える貴重な資源ともなっている。一方、食料生産の場である焼畑はパラゴムの林となり、村落周辺の自然環境も変わりつつある。私たち研究グループの衛星画像分析結果によると、1979年ごろと比較すれば、P村が属している五指山市の樹木の被覆面積は大幅に増加した。それは、パラゴムの植林と村落住民による盗伐の活動減少と関係していると考えられる。

P村の経験からみれば、こうした政府の政策の展開は地域の自然環境の保護及び住民の生活改善に貢献していると言える。これらの経験はGEF（地球環境ファシリティー）などの国際機関が提唱している住民生活



政府援助の換金作物苗木（扶貧苗）を配布する様子



パラゴム栽培のパイオニア世帯が家を建てかえる時の様子  
隣りはP村の伝統住居

改善と両立する環境保護の方針に合致している面が多い。しかし一方、必ずしも問題がないとも言えない、ハイブリッド水稲生産及び換金作物生産の背後に、農薬の使用の増加も起きている。この問題は生産者である農村住民の健康のみならず、消費者である都市住民の健康にも影響を与えかねない。そして、近代農業技術の導入によって、村落の労働力も余剰

となり、多くの若者は出稼ぎ労働者となっている。ほとんどの人は都市生活にあこがれ、故郷に戻ろうとはしない。日本の農村に起きているような過疎化の問題は海南島の農村でも急速に進行している。こうした様々な問題にどのように対応していくかは日本の経験を参考としながら私たちがこれから解決していかなければならない問題となるだろう。

## 摘要

# 经济发展与环境保护共赢的农村开发模式

——来自海南岛黎村的报告——

东京大学研究生院 医学系研究科 蒋宏伟

三十年的农村改革使得海南岛黎族农村的产业逐渐向市场经济型转变。通过经济政策与环保政策相结合的方式，海南岛的基层政府对这一转型起到了关键作用。这些经济政策主要包括粮食生产的集约化，经济作物的推广，而环保政策主要是指禁止刀耕火种。粮食的增产

不仅为经济作物栽培提供了部分资金，也缓解了由刀耕火种的被禁带来的粮食生产的不足。该政策模式的实施不仅一定程度上改善了村民的生活，也对自然环境的改善起到了积极作用。

## Abstract

# Environmentally sound development in rural China :

A report regarding the Li people of Hainan Island

Graduate School of Medicine, the University of Tokyo JIANG Hong-wei

In the past 30 years, the Li people's indigenous food production system has been transformed to the market economy. Local government policies played a key role in this process. These policies included the intensification of rice cultivation, the introduction of cash cropping, and the prohibition of slash-and-burn agriculture to protect the forested areas. Increased rice

production did not only provide a part of the money needed for investment in cash cropping, but also offset the losses in food production posed by the prohibition of slash-and-burn agriculture. This policy model may play an important role in the improvement of villagers' life and in the protection of the environment.

## 遊牧文明を源とする草原文化の現在

——「中国第4回草原文化百家論壇」の報告——



内モンゴル大学民族学与社会学院 ナムジリン・ボルド

近年、中国は継続的な発展を図るため「西部大開発」という国家的エネルギー戦略を起動した。国家は経済界を積極的に動かして、広大な西部地域での「活躍」を促した。それによりエネルギー開発や鉱物の採掘に始まる消耗型の経済が西部においてますます重要な地位を占めつつある。それにつれて、西部地域の自然環境が一層悪化して、もともと中国の主流文化や生産方式と一定の隔たりを持って生きてきた「弱勢コロニー」といわれた少数民族の生存がさらなる厳しい状況に追い込まれている。この西部大開発の計画に内モンゴル自治区は当然含まれている。

このような社会的状況の中、内モンゴル自治区で2008年12月9日～11日に首府フフホトで草原文化の再評価、保護、発展を趣旨とする「中国第4回草原文化百家論壇(フォーラム)」の開催を迎えることとなった。フォーラムを主催したのは、内モンゴル草原文化基金会であり、その主なスポンサーは大型テレビドラマ「チンギス・ハーン」の制作及び放映によって広く知られた民間企業の仕奇グループである。本論壇は今年で4回目の開催となる。

草原文化百家論壇は2006年に発足して以来、「草原文化の概念」、「草原文化と中華文明」、「草原文化と世界文明」などをテーマにして、これまで「草原文化」

そのものの検討と中華文明との関係、さらに世界文明における位置づけなどの問題を幅広く研究してきた。その成果は当基金会の季刊『伝承』にまとめられている。

第4回になる2008年のフォーラムでは「草原文化と現代文明」をテーマとし、構成は中国、ロシア、モンゴル国から代表それぞれ1名による基調講演、理論グループと応用グループと2つに分かれたセッションからなる。生態学、考古学、人類学、社会学、歴史学、哲学、経済学など多分野から約46篇の研究論文が発表され、国内外から研究者や草原文化に関心を示す社会一般の方々約200名が集った。さらに、国家体制改革委員会の元副委員長・中国鄧小平思想研究会会長の鳥杰氏と自治区の高官も参加した。

一番印象に残っているのは、内モンゴル大学の歴史学者齊木徳道爾吉教授による「草原文化を現代化へ」という基調講演である。氏は、内モンゴルが直面する草原文化の現代化問題は、近隣であるモンゴル国の状況とことなる前提や条件の中に置かれているため、現代化へ向かう道が違うのは当然であるという。中国の草原文化にはすでに深刻な中原農耕文化の影響がみられ、それはモンゴル民族と漢民族が長期にわたる相互の交渉や衝突の歴史的過程で形成されたものである。そうしたものを含めて、草原文化を生んだ源である遊



左上：フォーラムを発足させた仕奇グループの社長葛建さん  
左下：基調講演をしている齊木徳道爾吉教授（内蒙古大学）

右：会議風景



シンポジウム参加者たちの記念写真

牧文化を再評価、保護そして伝承して行くのがこれからの急務であろうと指摘した。

国民的な作曲家として知られるモンゴル国のジャンゾンノルブー氏による「草原の音楽—そのメロディーとムードの認知」というテーマの基調講演はこれまでの西欧中心的な音楽の評価に疑問を投げかけるものであった。草原の音楽、特にモンゴルのオルトインドー（モンゴル民謡の一ジャンル）は自然と人間の完璧な結合によって生成された芸術の表現であり、独自の独特な体系を持っている。そのため、モンゴル音楽のメロディーやムードの本質を一般的

に正統とされた西欧の音楽の価値傾向や理論だけで理解しようというのは困難であると指摘した。このほか、ジャンゾンノルブー氏はじめ一部研究者が内モンゴルで語られている「草原文化」という表現の学術的なあいまい性についての言及も興味を引く発言であった。

総合的に見れば、今回のフォーラムは、内モンゴルのモンゴル族の人々自らがおかれている現在の社会状況への認識を一層深め、このような社会状況の中で自らの文化やアイデンティティを保持しながらいかに現代と共存するかを考えさせられた言論の場となったといえよう。

## 摘要

### 以游牧文明为传统的草原文化

#### ——“中国第4届草原文化百家论坛”学术会议概要——

内蒙古大学民族学与社会学学院 宝力道

2008年12月9日—11日，以“第四届中国草原文化百家论坛”命名的国际研讨会在内蒙古自治区首府呼和浩特市举行。该论坛是以“草原文化”为中心议题，以发掘、保护、发展、传承草原文化为目的。在研讨会期间，多数研究者就目前我国对西部地域加大开发力度而加剧当

地少数民族文化丧失、自然环境恶化等社会问题表明忧虑，并试图通过研讨会呼吁政府及社会重视以游牧文明为源流的草原文化。与会者纷纷就草原文化的现代化为题目从各方面阐述了各自的观点。

## Abstract

### Present grassland cultures derived from nomadic civilizations :

#### “The 4th China Grassland Culture Forum” News Digest

College of Ethnology and Sociology, Inner Mongolia University NAMJILIN, Bold

“The 4th China Grassland Culture Forum” was held December 9-11, 2008, in Hohhot, the capital city of the Inner Mongolia Autonomous Region. This forum covered matters of grassland culture reevaluation, protection, development and transmission. At the forum researchers were concerned with social phenomena such as increased loss of minority race culture and natural environment deterioration due to present western region large-scale

development projects being undertaken by the State. Through the forum, reevaluation and reutilization of nomadic civilization-derived grassland cultures was proposed to the government and general society. In the forum researchers discussed Grassland Cultures from the perspective of modernization.

# 東方アジアの夢



総合地球環境学研究所所長 立本成文

国際関係論や地域研究者には、大陸生まれが多い。故衛藤藩吉さんのように名前を見ればすぐわかる（奉天すなわち瀋陽の一字を取ったもの）と言う人もあれば、えー、こんな人かと思うこともある。私は、半島の端っこプサン（釜山）で生まれた。少なくとも昔の戸籍には釜山草場町生まれということが書いてあった。現在でも草場洞として残っている。海岸沿いの市場から電車に乗っていけばよいが、歩いてもたいした距離ではない。

5歳になってから引き揚げてきたので、愛着があると言うほどではないが、いわゆる故郷がどこかよくわからない私にとっては、やはり懐かしいという思いはある。そのせいか、東南アジア地域研究を志した40年前頃の研究計画では、オランダのインドネシア、イギリスのマレーシア、スペイン・アメリカのフィリピンを研究して、研究対象地域を徐々に北上させ、老後は韓国・朝鮮研究で終わろうなどと考えていたこともあった。こと志とは違い、東南アジアから世界に目が向かってしまった趣もある。しかし、東南アジア研究者としては西からの影響とともに、北からの脅威は常に感じていた。特に中国との関係は深い。インドネシア、マレーシアにおける反中国感情を反映して、80年代までは、中国研究には手を染めなくなかった。というよりは雲南をはじめ、華人の出身

地である越の領域は東南アジアの一部を構成すると考えて、中華平原は別の世界であるとみなしていた。むしろ、東アジアの概念を変えて、東南アジアから西太平洋の沿岸地域一帯を一つのユニットと考えてみたい。これはいわゆるアジアグリーンベルトと重なる地域概念である。東洋とか、東亜と区別して「東方アジア」という言葉を作ってみたが、自分では気に入っているのであるが、誰も使ってくれようすはない。

とにかく周辺から中国を仰ぎ見る習性が身に付いたものとしては、できるだけ中華世界の偉大さを矮小化しようという魂胆が見え見えかもわからない。しかし、地域研究者としては、世界単位ないしはユニットとなる地域としては、アメリカ、ロシア、中国などの大国は大きすぎると感じる。それでは、インドは、ブラジルは、インドネシアは、どう考えるのかということが問われる。周辺地域を植民地化したという意味では帝国の野望を持っている国々とみなされても仕方ないが、大きさではなく、東方アジアというのは世界単位としての話である。

外地生まれという殻をひけらかすのも、帝国主義的心的のかけらが心をむしばんでいるからかもしれない。

参考文献：立本成文「東アジア圏論の構図」『アリーナ』第3号、p.24-31、2006年

## 摘要

## 东方亚洲之梦

総合地球環境学研究所所長 立本成文

对于长年研究东南亚地区的学者来说，该如何看待中国是一个十分棘手的问题。作为一个区域研究工作者，我并不主张将一个国家作为一个区域来进行研究。东南亚即为一例。从研究东南亚的视点来看，中国的云南就具有十分特殊的地位。因为无论是从语言上还是从民族上来说，云南都与东南亚华人十分接近，因而可以认为它是东南亚的延伸。从更开阔的眼光来看，如果我们认为存在有一个海洋性的地中海，便可将从东南亚到堪察加半岛的海上亚洲看成是东方亚洲。

## Abstract

## Imagining Eastern Asia

Director-General, RIHN TACHIMOTO, Narifumi Maeda

This essay proposes the concept of “Eastern” rather than East or Southeast Asia, excluding China. In keeping with this new delineation, it becomes necessary to: 1) acknowledge the ecological unity of the maritime world along the Asian green and blue belts, 2) revive the proto-historical interaction along sea routes between the North and the South in terms of both racial mixtures and trade routes, 3) incorporate, strategically, the recent political development of regional cooperation against the hegemony of global powers, especially the United States and the European Union, and 4) methodologically reshuffle area studies in keeping with a rethinking of the limitations of the nation-state.

Reference: N. M. Tachimoto, ‘Community and Identity in Eastern Maritime Asia,’ in East Asian Review, vol. 10, pp.3-12. 2006.

# 反転する中国史



鹿児島大学法文学部 高津孝

中国の歴史は、しばしば北中国から南方へ向かっての開発の歴史として語られることが多い。中華文明の多元的起源論が主張される現在でも、開発史としての視点は史的研究の前提として存在し続けている。しかし、開発とは何であろうか。その多くは定住型農業システムを基本とする人々の移住、拡散に始まり、そこに帝国システムとしての官僚組織が構築される形式に収斂される。それはフロンティアの開発として記述されるが、本当に人跡未踏の地への進出であったのだろうか。

定住型農業システムとは異なる拡散型非集住システムを取る人々にとって、土地利用のあり方は根本的に異なる。土地の占有権は必ずしも定住を前提とするものではない文化がそこには存在した。奪われしものの視点からは、開発史は、収奪の歴史に他ならない。試みに、中国の方言地図を開いてみるならば、北中国の一元的北方官話の存在に対し、南中国は複雑に諸方言が入り組んで存在することが分かる。それは過去における多様なエスニシティ集団の存在を示唆しており、武力を含む種々の社会的圧力によって、長い時間を掛けて同化していった痕跡とも解釈可能である。

さらに、中国南方から東南アジア内陸部に島状に存

在する少数民族地域の存在を考えると、土地を奪われ、僻地へと追いやられていった過程を想像することはたやすい。文献史学が文献によってのみ歴史を構築する時、文献を持たない人々の歴史はいともたやすく無視される。歴史は勝者の歴史に過ぎないと言われるが、歴史家は勝者にのみ加担してきたのではないか。

遙か昔、モンゴロイドが東アジアに到達し、自然環境に適応して拡散していき、様々な生活様式、エスニシティを形成していった。土地の争奪は常にどこでも有り得たが、強力な武力と、生産性の高い定住型農耕様式の拡散は、他の土地利用の形式を圧倒し、進展していった。そうした強力な漢族システムに寄り添うように存在したのが、帝国システムとしての官僚組織であり、書記言語のシステムであった。帝国システムは大量の文献を生産し続けるが、官僚としての文学者もその一部である。著名な文学者が辺境地域に左遷された時に生み出された作品は、強烈な中央志向と他者排除の言葉に満ちている。その意味で彼らは帝国システムの共犯者に他ならない。書記言語にのみ依拠した過去像ではなく、声なき人々の声に耳を傾ける方法の模索が、いま最も必要とされているのである。

## 摘要

## 重审中国史

鹿児島大学法文学部 高津孝

中国の歴史、常常被描述为一部开发史。但这里所指的开发却并不一定是人们通常所说的向人迹未至之地的迁移和开拓，而大多数情况下，是指定居型农业体系的人们向扩散型非集中定居体系的人们所居住的地区展开迁移和扩散。他们在“新天地”建立一个帝国体系的官僚组织，并以文书语言记下这段统治者的历史。所谓的开发史，就是一部掠夺和同化的历史。

## Abstract

## Turning Chinese history on its head

Kagoshima University, Faculty of Law, Economics and Humanities

TAKATSU, Takashi

The history of China is often described as a history of development. However this development was not always advances into uncharted territories. It was mostly the migration and spreading out of people from a society of settled agriculture into areas where people lived nomadically. From then bureaucracy in the form of the empire would take hold and history would be described by the pen of the conqueror. The Chinese history of development is nothing less than a history of plundering and assimilation.

# ウと生きる、ウが生きる — 中国の鵜飼い漁撈民 —

日本学術振興会特別研究員(東京大学・人類生態学教室) 卯田宗平



「鵜呑みしろ」と漁師に怒られるものがある。

ウ本人(鳥)である。ウは、水中で魚を見つけると嘴を使って魚をはさみ、水上に浮び上がる。そして、くわえた

魚を嘴で回転させ、頭から丸呑みする。その際、ウが魚をくわえ続けると魚の表面に傷がつく。

日本では、ウの嘴によって傷のついたアユを「歯形のアユ」や「ウアユ」と呼び、高価なものとして扱われている。一方、中国では、傷のついたコイやフナ、ナマズに価値があるところか「傷があるから安くしろ」と農民に言われる始末である。そのため漁師は、せつせと魚を獲るウに対し、魚をすぐに呑み込むように指示するのである。

ウを使って魚を獲る行為は、日本と中国、そしてヨーロッパで行なわれている。日本の鵜飼いは、現在ではおもに観光を目的に行われており、ヨーロッパのそれは鷹狩りと同様に一種のスポーツとして認識されている。一方、中国の鵜飼いは、ほとんどが生業として続けられている。その漁法は、個人漁や集団漁(写真1)であったり、竹船や双胴船(写真2)を利用したり、刺し網を併用したりと地域によって相違がみられる。

中国の鵜飼いはさまざまであるが、各地で共通している点もある。それは、どの漁師もウをよく観察し、根気よく愛情をもって飼育していることである。たとえば中国江西省ポーヤン湖の漁撈民は、朝起きるとまずウに水を与え、体調

が悪いウを漁に出さず、操業中に調子が出ないウを船に戻したりもする。また漁師たちは、若いウを飼育し馴らすために、操業中にあちこち逃げる若いウを追いかけて捕まえる作業を約3ヶ月間、何度も繰り返す。

こうした漁師たちが今、口癖のようにいう言葉がある。それは、「ウがよく病気にかかるようになった」である。主な原因は、水質の変化であるという。ウは、魚食性の水鳥であり、食物連鎖の上位に位置する。それゆえウは、特定の物質が蓄積し、その濃度が増す生物濃縮の危険に見舞われる可能性も高い。つまり、魚を鵜呑みするウは、水質変化の影響を強く受けるのである。

高度経済成長期、日本では残留毒性の強い農薬が使用され、それに呼応するようにコウノトリやトキを失い、カワウの営巣数も減少した。一方、中国では、現在、いたるところで水環境問題が顕在化している。ウの体調を気にする漁師の言葉もあちこちで聞く。こうした中国で今、水鳥にやさしい環境をいちばん願っているのは、ウと生きる漁師なのかもしれない。なぜなら、その環境でウが生きるからである。



写真1: 集団漁では、15〜20人の漁師が漁をおこなう(中国江西省)



写真2: 持ち運びに便利な双胴船。バイクなどに乗せて移動する(中国湖北省)

## お知らせ

・2009年4月より中国環境問題研究拠点の代表が鄭躍軍より窪田順平(総合地球環境学研究所)に、拠点研究員が

児玉香菜子より松永光平にかわりました。

## 最新动向

・从2009年4月起, 综合地球环境研究所洼田顺平接任前任中国环境问题研究基地郑跃军职务。松永光平接任前任基

地研究员儿玉香菜子员职务。

## Notification

・In April 2009 Jumpei Kubota (Associate Professor at the Research Institute for Humanity and Nature) succeeded the position as the leader of the RIHN Initiative for Chinese

Environmental Issues (RIHN-China) from Yuejun Zheng. Kohei Matsunaga succeeded the position as the research fellow of RIHN-China from Kanako Kodama.

発行日 2009年4月25日

Date of Issue 25 April, 2009

編集・発行

Edited and Published by

中国環境問題研究拠点

RIHN Initiative for Chinese Environmental Issues

〒603-8047 京都府京都市北区上賀茂本山 457-4

457-4 Motoyama, Kamigamo, Kita-ku, Kyoto 603-8047 Japan

総合地球環境学研究所

Research Institute for Humanity and Nature

TEL 075-707-2462 FAX 075-707-2513

TEL: +81-75-707-2462 FAX: +81-75-707-2513

<http://www.chikyu.ac.jp/rihn-china/>

<http://www.chikyu.ac.jp/rihn-china/>

製作・勉誠出版

Produced by BENSEY PUBLISHING INC.